

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 57
2008(平成20)年3月17日(月)発行



<1945(昭和20)年3月17日、硫黄島の日本軍、全滅の日>

アジア太平洋戦争の末期、栗林忠道中将指揮下の陸海軍 21,000 名の兵は、2月19日早朝に上陸を開始したアメリカ軍第3・4・5海兵師団 61,000 名の攻撃で、3月17日、残兵 800 名が突撃し全滅。米軍も死傷者 29,000 名を数えた。一昨年の 2006 年、クリト・イストウツト監督の映画『硫黄島からの手紙』は栗林中将(主演渡辺謙)を主人公に、また、摺鉢山に星条旗を掲げ生存した3人の兵士が、士気を鼓舞するため利用されたという映画『父親たちの星条旗』も話題になりました。



戦時中の誇りに思う父のこと

原町区日の出町 石塚京子

秋田県角館に生まれて

私は昭和十七年、秋田県角館町雲沢村八割に生まれ、そこで戦争の悲惨さなどは全く分らないまま育ちました。その母の里は、電気も無く、菜種油の行灯(あんどん)の生活で、水は、山上から台所の下を流れて来るおいしい水を使っていました。食料は幸い、山の中なので何でもあり、けっこう豊かな自給自足の生活ができました。人も大勢出入りしていましたので……

B29が爆弾を投下

しかしそんな中でも、B29という敵国の飛行機が飛ぶ音を聞くと、誰からもなく、「B29だあー」と叫びながら、何度も何度もながめていました。そんなある日、隣村の女の人が夜、菜種の行灯をつけて腰巻を取り替えようとしたり、爆弾を落とされて恐ろしいことになったと大人の話を聞き、幼心に怖かったと記憶しております。

戦時中、父のことが

戦争の頃、私は二、三歳でしたから、母の弟を父親と思いき、自分の本当の父が戦争から帰って来ても、「おじさん、おじ

さん」と呼んでいました。また私の父は筆まめで戦場地から、とにかくこまめに私宛に葉書を送ってくれていたようです。母は葉書が来るたびごとに、私に読んで聞かせてくれていました。が、中身は戦場の激しさや私の安否を気遣うことだったように記憶しています。

戦地から絵本を送ってくれる

父は衛生兵でしたから、軍医に従って動いていたようです。多分中国の満州にいたらしいのですが、色々物資やたぐさんの絵本なども家に送ってくれていました。絵本の『安寿と厨子王』『うさぎとかめ』『さるかに合戦』『花咲じいさん』『饅頭姫』『鉢かつぎ姫』など送ってくれて、母はいつも読んで聞かせてくれました。その絵本の絵のなんと美しかったです。とか、よく覚えてます。

でも、戦地から日本に物資や手紙を送るには、管理所管で検閲を受けて通過しないと日本には届かなかったそうです。戦場に少しでも不利なことが書いてあると抹消されると聞かされていました。軍隊の中で「戦争がいやだ」と言う味方から殺される、と父が話していたことも思い出されます。

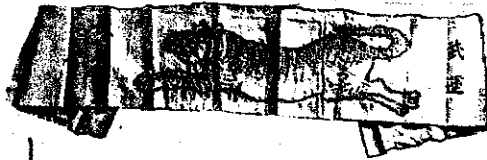
父が乗った汽車を見に行く

父が戦場から一時帰国で、「どこそこを汽車で通る」と連絡があり、母は必死の思いで私を連れてその日の時刻に行ってみると、汽車はすでに通ってしまっただけで、何回か母はそんな目に会ったようです。また、父の無事を願って「千人針」を送るなど、並々ならぬ祈りがあつたようです。そのお陰か、終戦前に父は無事出征から帰り、全国三位表彰されるほどの腕を持つ洋服店でしたが、母の身内から「角館の山で暮らしたら」の忠告で、父の里(秋田県美郷町)に親子三人で住むようになりました。ところがそこで、戦争の恐ろしさを目の前に見せつけられることになりました。空襲のサイレンが鳴るとか、綿帽子の「防空頭巾」をかぶって防空壕に逃げたり、何とオツカナイこと、山の中のんびりとB29をながめていたのとは全く違う所でした。

防空頭巾



(裏面に「つく」)



▲「千人針」
出征兵士の無事を祈願して、千人の女性が一针ずつ赤い糸で千個の繻い玉で「虎」の図柄などを作って贈った。日清・日露戦争の頃に始まり、初めは「虎は千里走って千里をもどる」の言い伝えから、青年生まれの女性千人で作った。



防空壕 空襲のときに避難するため、地を掘って作った穴。

(前面よりつづく)

戦争も終わってしまった原爆の戦争映画
うようになって、月に一、二回、「広島・長崎の原爆」等の戦争の悲惨さや阿鼻叫喚の地獄の世界を映画館で見ようになりました。先生からは「目をそむけないでしっかりと見て心に刻むこと」と言われましたが、とにかく、被爆者で埋めつくされた川、死んだ人が流されていく場面など、本当に恐ろしい場面ばかりでした。

傷痍軍人の姿に戦争を憎む

また、終戦のその頃は、戦争から運良く帰国できても、片足が無かったり、腕が無かったりした傷痍軍人(しょういぐんじん)が、お金を貢いで貰うために、街中を苦しい体を引きずって一軒づつ回って、生活費を求めていました。私は気の毒に思う前に、戦争そのものを憎みました。戦争の恐ろしさを実体験して、気が狂った人もいました。私の父はそんな人を見ると、

自宅に連れてきて、丁寧に手厚くもてなしました。私の子供の頃の、誇り高い父の想い出です。

原町の神岡特攻隊員は

原町に住むようになって、若い頃たまに、押釜の〇さんというお婆さんのお宅には、特攻隊がよく集まったそうです。特攻機に乗る前に、せめて両親に一目会って心おきなく死出に向かえるように国が計ったそうですが、しかし、特攻隊員は誰一人自分の実家へは帰らずに、〇さん宅で一夜を過ごして帰っていったと聞きました。特攻隊員の残された文集の文面も、国の意に添うように書かなければ届かないし、残されないし、また懲罰も待っていたとのことで、何とも恐ろしいことです。

元特攻隊員は黙して語らず

二十年前位前に、ある集会の担当をしていた時期がありました。その人々の中に終戦で無事逃れた元特攻隊の方が数人おられました。でも、その方々は本当に黙して語らず、数カ月にポツリポツリと当たりさわりのない話をされていたという記憶があります。

戦争は絶対いけぬ

とにかく、どんな理由でも戦争は絶対いけぬ。戦争を起す元を無くして、いろいろな方法で今の平和をずっと守っていかなくてはならないと思います。

(「はらまち九条の会」会員)

戦争あった時代
もつと理解して

福島市

菅野 家弘 65 無職

「子どものころ戦争があった」という本を読んだ。戦前、戦中のころの学校や人々の日常生活がうつられた本で、一気に読んでしまった。

お譲りの教科書、ノート代わりの石盤、ヤマツツジやスカンボを食べたこと、アメリカとの開戦、軍国主義教育などそのころの日々の生活がたんとと記述されている。

私が生きた時代と少し重なるせいか、書かれている内容に引き込まれ、一緒に生きてきたような錯覚を覚えた。

そして感じたのは当時の教育や学校を取り巻く政治の恐ろしさと家族の温かさだった。これと似た感じの映画「母べえ」を見たばかりだったので、そう思ったのかもしれない。この映画

も千も万の言葉よりもはっきりと戦争とその時代を描いていた。

戦争の時代をもつと深く理解してほしい。そして、平和を守りたい。この本と映画はそう伝えていると思う。

▲3月5日付「福島民友」「窓」より

○『九条はらまち』No.54で紹介しましたが、佐藤邦雄さんの著書『子どものころ戦争があった』を読まれた福島市の菅野家弘さんの投書です。
○菅野さんは福島市の「田沢・清水・蓬萊九条の会」の事務局を担当されていて、去年は原町で「沖縄戦での自決問題」の講演をされています。



映画とともに 興味深く面白い小説です!

『小説 日本の青空 ~安蔵そして作造・悦二郎』 ¥600

○映画「日本の青空」の脚本執筆の池田太郎著の小説。三島町大内書店で販売中です。
○小高町の様子、鈴木安蔵の生い立ちや生家の紹介、安蔵の家族、相馬高校、民本主義の吉野作造の影響、憲法成立時の国務大臣植原悦二郎、島崎藤村の姪のこと、GHQなど豊富なエピソードが興味深く描かれています。



「映画『母べえ』上巻会を
原町でもやらせたいかな」という声もあります!